暗い絵

―――― 映画文学人生論

原作：野間宏（1946）「黄鉢」
参考：『わが青春に悔なし』
監督：黒澤明（1946）
出演：八木原幸枝　原節子　脚本：久坂栄二郎
野毛隆吉　藤田進　撮影：中井朝一
八木原教授　大河内傳次郎　音楽：服部正

草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ
雪風が荒涼として吹き過ぎる

野間宏の『暗い絵』は終戦後登場した第一次戦後派作家の代表作。若い頃、私も敬意を表して読みかけたことがあるが、散文詩のような文体で。読みにくい。ついていけなくなって、あえなく途中で脱落した。

草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。はるか高い丘の辺りは雲にかくれた日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぽつりぽつりと開いている。

今回はなんとか最後まで読み、昭和初期の暗い時代の学生たちの青春がどんなものかを知った。暗い絵とは十六世紀のフランドル地方（現在のベルギー）の農民を描いたブリューゲルの絵だが、小説の学生たちの時代は昭和二十年までの京都。

永杉英作は大学を卒業する間際に検挙され、非転向を声明して一年余りの獄生活の後、獄死、羽山純一は大学を出るとすぐ出征して軍隊生活中逮捕され、陸軍刑務所で獄死、木山省吾は彼らの弔い合戦を決意し、太平洋戦争の勃発直後、ビラ撒きの役割を引受けて検挙され、獄死した。

非合法の政治活動をしていた仲間で生き残ったのは深見進介だけである。彼は三年余りの兵隊生

暗い絵――――映画文学人生論

活を終えて、内地へ帰還してから逮捕され、転向して出獄し、生活費を得るため軍需会社に務めたのであるが、彼等の死を知った時、彼は〜いよいよやったな」と思い、如何なる力をもってしても変えがたい彼等の意志を感じた。彼等の行動が間違いであるとは彼には考えられなかった。彼自身が間違っているとも考えないが、彼は泣いた。

そして、戦後になって、ブリューゲルの暗い絵を思いだす。大地に悩みと痛みと疼きを感じ、その悩みと痛みと疼きによってのみ生存を主張しているかのような黒い円い穴が開いている。羞恥心のない女の背のようなくぼみのある丘には、毒茸のような首吊り台がにょきによき生え、醜い首吊人がひょろ長い木の枝にぶらさがっている。絵の中央には、磔刑にされたキリストの体が、半ば膝をつくように十字架の下に横たわっている。

爬虫類のような尾をつけた人間、蛙の水かきの皮を五本の指の間にもった人間、ひとでのように幾本もの足を体中にはやしている人間、人間の足をつけて歩いている魚――その不気味な絵は深見進介が永杉英作から借りたものだが、大阪が空襲された時、油脂焼夷弾の飛び火を浴びて燃え、灰になってしまったのである。

暗すぎて重苦しい。気を取り直し、時代背景が同じ黒澤明の映画『わが青春に悔なし』を観た。

崩壊感覚　顔の中の赤い月　　野間宏